

ふるさと、風

第83号 (2013年4月)

風に吹かれて (61)

白井啓治

『桜の下で花ニラの真白く春の朗らに笑う』

寒さ厳しい冬だと思っていたが、春の訪れは驚くほど速く、春の心づもりをせぬうちに梅の花、辛夷の花、木蓮の花、桜の花、桃の花、雪柳の花、菜の花など一斉に満開となってしまった。庭の蔭の藁が、今年が遅いなと思っていたら全部の春が一時にやってきてしまった。三月の中旬だと言うのに二十五度を超す夏日がやってくるなど誰が考えたらうか。

こうした例年に違う状況が生ずると直ぐに「温暖化による異常気象だ」と報じられる。確かにそうした側面も大きくあるだろう。しかし、地球年として宇宙的に眺めると、温暖化現象は過去に幾度もあったであろうと思う。悠久の宇宙時間から眺めてみると地球の寒暖のウェーブはちよつとした寝返りの様なものなのかもしれない。人間の自覚できる時間の流れなど、星の瞬きの届く距離の時間から見ればアツと叫ぶにも満たないのだから、今宇宙は膨張を続けているのだと言う。そして、何時かは大爆発を起こすのだとも言う。ただその時間は人間という種が地球上にいななくなってしまう後なのだろう。

こんな本を読んだことがある。進化の極大化した生物は必ず滅びる、というものである。恐竜の絶滅は巨大隕石の衝突によるものと言われているが、単純にそれだけではなく、恐竜の進化が極大化の時期に来ていたものだから、隕石落下による気象条件の変化に恐竜どもが対応できなかった。ほぼ全滅したのだと言う。そうした話を現在の人間に置き替えてみると、人間も進化の極大化が来ていて、そろそろ絶滅するのかも知れない、と考えるのはそれほど無理な話とは言えないだろう。とは言え人類の滅亡がやってくるのは我々が今認識できる時間の今日か明日という訳ではないだろう。

この冬から春への日本人の気象へのうろたえ振り、滑稽と言えないものがあった。猛吹雪の襲来で大騒ぎしていた次の日は真夏日になったと大騒ぎした。これでは確かに体がついていかない。だが植物たち、特に雑草と呼ばれる草達は、内心戸惑いはあったにしろ己の生きるべき行動は確実に実行している。我らのように右往左往していない。その姿を見ていると人間と言う種の生存は長くはないなと思ってしまう。

さて、アベノミクス効果で景気がやや上向いてきた、と大騒ぎしている。証券・金融界ではバブルの様相を見せ始めている。やれやれである。経

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平 ちえこ 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com/>

済の活性化は歓迎すべきことではある。だが、金を儲けて溜め込もうと言う感覚は捨てて貰いたいものである。何億、何兆金を儲けようが、金では生活は成り立たない。所詮は道具にすぎないのだから、その道具を用いて生産を行い腹を満たさなければならぬ。生産の無い、道具集めの経済だけは勘弁願いたいものである。経営の格言に「入りを図りて出を制す」とあるが、これは道具を集めるための格言で、生活のための格言にはならない。入りと出の収支0が生きる格言であろう。

「法律」とは、一体なにものだ？

「法律は、善人のために作られたものに非ず」。これは、ソクラテスの言葉。「法は悪人のために作られたものなり」これはイタリヤの諺。そして、ドイツの諺に「法律とは蜘蛛の巣のようなもの。ハエは捕えられるが、カブトムシは突き破って通り抜ける」とある。

実情に合わなくなった法律なんて、早速、変えればいいじゃないか…と誰でも思うが、どうやら、そう簡単には、いかないものらしい。常に既得権堅持の亡者などが、立ちほだかる。

そもそも、あらゆる法律の親分みたいな、国家存立の基本法である「憲法」については、その改正など、簡単にはできない仕組みになっている。憲法は、その実体と成立したプロセスが問題。

もし、北朝鮮の現体制が崩壊し、国連などが新たに「平和憲法」を作らせるとしたら、再び異常行動を起こさないよう、ハードなシステムを押し付けるほかあるまい。あたかも、現在の日本国憲法が成立した、かつてのプロセスと同じように。

現在の日本国憲法は、1945年(昭和20年)に、日本軍の無条件降伏・民主主義の強化・基本的人権の尊重・平和政治などを要求するポツダム宣言を受諾し、連合国軍総司令部監督の下、「憲法改正草案要綱」を作成し、「大日本帝国憲法」を改正する手続きにより公布され(昭和21年11月3日)、昭和22年5月3日から施行された。それ以来日本国憲法は、今日まで一度も改正されていない。陣笠連は、一票の格差の問題で、我が「席」を護るため、違憲判決など知らんぷり。恐れ入谷

の鬼子母神だ。日本国憲法の三大要素は、①国民主権、②基本的人権の尊重、③平和主義である。

先の総選挙では、国際情勢の変遷により、憲法改正を主張する政党もあった。憲法を改変するためには、衆・参両院の各議員総数の3分の2以上の賛成により、国会が発議し、国民投票によって、過半数の賛成を必要とする(第96条)。憲法は、不磨の大典ではない。わずかこの13年間にスイスは23回、ドイツは11回、フランスは10回も改憲されたという。制定以来一度も改正されていない日本国憲法は、真に稀有な存在と言われる。

先の大戦で、国民が悲惨な目にあつたことを、絶対に繰り返してはいけない…という理由から、護憲一辺倒。石にかじりついても改憲絶対反対を強調する政党もある。一方、わが国固有の領土を、虎視眈々と狙っている近隣諸国の野望を阻止し、しつかり軍隊を持ち、国土を守るため、早急に憲法改正が必要とする政党もある。どちらの言い分も、ごもつとも。未来をしつかり見つめ、国民は冷静な判断が必要である。

* * *

さて日本では、庶民の生活に関係の深い「民法」は、1896年(明治29年)公布、98年施行。

昭和22年一部改正はあつたが大方は当初のまま、117年も経っているのに、今なお厳然として法曹界を支配している。当然、時代の変化にそぐわない事は山ほどある。しかし、どんな理由があるか知らないが、大幅改正は見送られてきた。なぜ実情に即した改正がその都度行われないのか。

【ところが第2次阿部内閣は、15年の通常国会に、現状民法を300項目ほど、改正する法案を提出すると最近発表があつた。その一例は、連帯

保証人の悲劇などを避けるため…とのこと。】

民法以外でも昭和25年前後に公布された法律は多数あるが、どう見ても現状との間に大きなギャップがある。なぜか60数年を経ても一向に改正されない。事なかれ主義・現状踏襲の権化だ。施行規則や、細則をチョコチョコト変えるだけ。煎じつめて考えれば、民意は、立法院に反映されていない。日本に真の民主主義が根付いていない。その一例は、わが国では、起業家にとって何か事業を始めようとすると、土地の確保がまず問題となる。土地が決まれば、事業は九割完成…とも言われる。起業家が遊休地などに目をつけ話を進めようとすると、実は農地法など、ガンジガラメの規制にぶつかり、一歩も前に進めない。縦割り行政で、ある省庁関係は、クリアしても、他の省庁管理の法令では、クリアできず、無念の涙を呑む例などよく耳にする。

国の補助金を受け、耕地整理をしたが、後継者が無く、農地は荒れ放題。こんな現象は至る所に見られる。耕作放棄となる可能性があるのなら、なぜ莫大な補助金を使い、耕地整理をしたのか。国は巨大な借金を抱えているのだから、補助事業は慎重に行うべきである。税金の使途に国民は、無関心であつてはならない。会計検査院がよく口にする、「費用対効果」は、着手前に十分検討しておくべきではなかったのか。裏を返せば、この類の事案には悉く怪しげな「族議員」とやらが絡んでいる。「既得権の堅持」ただこれあるのみ。

法律とまで言わなくとも、施行規則や細則。それに基づく通達。更には地方の条例など、あまりにも規制が厳しく、何を起業しようにも、法の壁にぶつかり、すんなり着手が出来ない。なにゆえ

こんなにも多くの法律で、ガンジガラメに縛らなければならぬのか？窮屈千万である。イタリア風解釈によれば、法の存在が鬱陶しいと感じるのは、私が「悪人」だからなのであろうか。

* * *

国会中継をテレビで見た。日本維新の会の自称「暴走老人」こと、石原共同代表の総理所信表明演説に対する代表質問は、1時間40分に渉る、まるで演芸独演会。『昔、〇〇というバカな総理がおりましてネ…』この調子。代表質問なのだから、即答を求めると思いきや、『これは、答えなくとも結構。心に留めておいてください…』と度量の深さをお披露目する。

都民のために、斬新なアイデアで何か事を起こそうとすると、国は色々な法律を持ち出し、寄つてたかつて潰しにかかる。(橋下大阪市長も同じ事を言っている。要するに、地方のアイデアが国より優れているなどは、メンツにかかる？…)。

法律には「〇〇大臣の許可がなければ、〇〇をしてはならない…」などの例が多い。法律とは、まるで、ある一定の既得権者の利益が損なわれないよう、他を排除するような仕組みにも見える。それゆえ、イタリアの諺に従えば、後発業者など、まるで「悪人」だから法で縛る？

先進国では、既に開発され、国民がその恩恵にあずかっている、例えば医薬品や医療器具など、わが国では、気が遠くなるほど認可が下りない。

例えば、ある伝染病のワクチンは、日本では昔からの「不活化ワクチン」で、その病気を予防してきた。しかし、起こりうる問題を解決し、安価で一層有効な「生ワクチン」が外国で開発され、大きな効果を上げているというのに、日本では輸

入も製造も簡単には許可されない例がある。国民はどうして…と泣きの涙だが、その裏は…。あとは、読者のご賢察にお任せする。

【欧米では、認可に1年かかるところを日本では3年かかるとも言われる。日本の審査手数料は、米国の4倍、韓国の8倍とも言われる。誰の圧力か知らないが、先発開発者を護るため、後発開発者を徹底的に抑え込む。おかげで国民は安価で、より有効な薬品を、先進国より、はるか後になり使用することになる。こういう腐ったシステムを一気に変えたいのが、暴走老人の真意らしい。】

* * *

原発に代わり、環境を汚染しない、しかも無限のエネルギーを取得できる「地熱発電」を起業しようと思えば、「自然公園法」が簡単に許可を下さない。地域住民も、それ温泉が涸れる…とか、景観を損ねる…とかでなかなか同意が得られない。この非常事態だというのに『補償が欲しいのか？』と言いたくなる。一党独裁が良いとは言わないが、国家の非常時なら、有無を言わず、即着工…と、なぜ、できないのか。

法律でガンジガラメの日本。それほど法規制が厳しいのに、なぜこんなにも詐欺事件など多いのか。至る所カブトムシだらけである。投資話や、オレオレ詐欺事件などあまりにも多すぎる。警察も頑張っていると見え、刑務所は至る所、満員とか。人間の「性善説」など、単なる架空の設定で、「性悪説」こそ、本命なのか？

* * *

新聞のコラムにもあったが、12年4月、京都府亀岡市で少年の運転する軽自動車が、無免許運転で、小学生の集団登校の列に突っ込み、10人の死

傷者を出した。その判決は5〜8年の不定期刑。

あまりにも軽い判決に被害者は呆然。国民の多くも開いた口がふさがらなかつたであろう。判決理由は、無免許とはいえ運転技術は未熟とは言えない。それゆえ「危険運転致死傷罪」ではなく、「自動車運転過失致死傷罪」と判定したのだという。

多数の人を死傷させたという厳然たる事実があるのに、「法」の適用とは、なぜこのように社会通念とかけ離れたものなのか。法治国家の最高機関がこのような浮世離れた法解釈とは、我々庶民には納得がいかない。被害者の無念と法解釈による裁定とは、関係ないというのであろうか。そもそも無免許運転に、運転技術の未熟も熟練もあるのか。根本の扱い方がおかしい。常習の無免許運転少年が、睡眠もとらず走り廻り、朝方、居眠り運転で小学生3人も殺害したのである。我々一般人と、法で裁くプロの法律家とは、感覚のズレが、こんなにも大きいものなのか？

大体にして、日本の裁判では、加害者保護が過剰ではないのか。超悪党の被告人に時により、なぜ国選弁護士など付ける必要があるのか。そうはいえ、加害者にも人権はあるだろう。昔のような「獄門曝し首」とは、今時通用しまい。三食冷暖房付きで、医療も確保され、シャバで苦労するなら、刑務所の方がずっとまし。再犯を繰り返し、「定宿」を決め込む常習犯もいるとか。

それに対し、被害者救済は、あまりにもお粗末。殺され損だ。こんな状態では、日本は先進国などとは、到底言えない。

* * *

先月号で私は、福島原発事故の後、放射能汚染で、農畜産物や海産物の出荷制限基準を、日本は

なんで国際基準の10倍も厳しくしなければならぬのか」と論じた。

【私は我が国の食糧自給率³⁹%の異常事態に疑問を持ち、食糧の安全保障こそ、最重要課題と常々思っている。もし輸入がままならなければ、国民の6割が死ぬことになる。日本が金に任せて世界の食料を買い漁らなければ、世界の低所得者はもっと楽な生活ができる。ある一定量の穀物なら10人が生きられるところを、その穀物を家畜の肉に変えれば一人しか生きられない。食糧の貿易は、全人類の食糧事情を考慮して行うべきもの。

貿易商社が金設けのために無定見に行つてよいものではない。金があるからと言って、一部の豊かな国だけに飽食が許されるべきではない。それゆえ、偏見による風評被害で、必要以上の規制をかけ、食物を捨てるべきではない。】

それなのに、放射能に消費者が過敏になつていくからと云え、何もかも規制値は厳しく設ければそれでよいというものではない。自然界には、放射性物質は、かなり存在している事は、先月号で詳しく述べた。規制値は、国際基準でよいはず。むきになつてその10倍も厳しくする根拠は何なのか。医療診断や、治療でも放射線はしっかり浴びている。定められた基準以内であれば、許容される。生物は天然の抵抗力を備えているからだ。

今生きている生物は、自然界のそれら放射線に耐えきれる能力を獲得した種のみである。獲得できなかったものは、自然淘汰され、既にこの世から消えていった。なのに、放射線は限りなくゼロに近くなければ納得できないというのであれば、中途半端な知識で社会を乱すな」と反論したい。被災地の農業再生を拒み、消費者のエゴで、風評

被害の悲惨さを増加してはならない。

牛肉のBSE規制の際も我が国は、国際基準より遥かに厳しい基準を設け、関係者に自殺者が出るなど、日本の行政は消費者に押しまくられ、生産基盤を混乱させた。それほど完璧主義を通じたのならば、食品に100倍ぐらいの対価を払う覚悟がありますか」と言いたい。それが、あれほど騒いだBSEも、喉元過ぎればなんとやら。世の中が静かになつたら、政府は13年2月、サッサと国際基準に戻してしまつた。自殺させられた人になんと言いつける気なのか。

【今回も、福島原発事故強制避難区域の酪農家が生きる柱を失い、自殺している。】

食品は、当然、厳しい安全基準を守らなければならない。その基準は、世界に共通した、しっかりとした根拠を持つている。それを一部圧力団体などに押しまくられ、ふらふら揺れ動くものであつてはならない。日本は先進国のプライドをかけた、大変厳しい基準で国民を守っている……として、必要以上の厳しい基準を設けたりしているが、それは、道理に反する。世の中には、常軌を逸した反対者はどこにもいるもの。そのような社会の秩序を乱す異常例は、立法府も行政府も、高い見識を持つて、毅然として制圧しなければ、国が乱れる。

【私に言わせれば、潔癖主義というものは、非常に危険性を孕んでいる。日常の消費財に「抗菌加工」など施して清潔を売り物にしているが、あんなものは、かえつて人体の抵抗力獲得を阻害し、軟弱な体を作る元凶である。強力な病原体は確実に殺す必要があるが、身の回りの常在菌は意固地になつて殺菌する必要はない。赤ちゃんは、何でも舐めて抵抗力をセッセと育てている。うがいはい

通常の水道水で丁度良い。うがい薬で口腔の先住民である共生菌までも殺したら、却つて病気を呼び込む。清潔主義と勘違いし、薬屋に踊らされる愚は止すべきだ。消費者の中途半端な知識をくすぐり、商魂逞しい金もうけ主義に、我々は加担してはいけない。昔は殆どなかった花粉症やアトピーの患者など、哀れな犠牲者である。】

低濃度放射線汚染の農畜産物・海産物などは、定められた一定基準以内であれば、被災地の復興支援のためにも、積極的に購買を促進すべきである。

風評被害は正に生産者いじめに当たる。日本人の非妥協的な完璧主義が、国内の流通のバランスを崩している。政府はそれに加担するのではなく、調整役として、長期展望で国民をリードすべきである。国土が活力に満ち、一層発展を遂げるためには、斬新なアイデアが存分に活用できるように、余計な規制を緩和すべきである。

筑波四面薬師を巡る

木村 進

奈良時代の後期に、奈良の東大寺や興福寺で法相宗を学んだ徳一法師はまだ二十歳〜三十歳ぐらいの若さで東国にやってきました。今ではこの宗派は奈良の興福寺や薬師寺などごくわずかな寺を残すだけで、他の宗派の寺に代わってしまいました。中国やインドの仏教が日本に伝わってきた当時にはこれを学問として熱心に学び、広めていくという機運が高まっていたのです。徳一法師は奈良の都を離れ、東国の各地をまわり、主に山

やその麓に多くの寺を建立し、布教・修行していききました。東国に来て、まず、目をつけたのが筑波山です。とても神聖な靈気を感じたのでしよう。今の筑波神社のある場所に寺(中禅寺)を建てるところにしました。当時はまだ土浦やつくば側から山に登るルートは確立していなかったため、建設の物資を運んだりするルートを開拓したと思われます。それが現在の六所神社(跡)の脇から白滝を経由して、常陸国府(石岡)側からのルート(府中街道)に出て、東山地区を通っていく道でした。この中禅寺の建立は西暦782年といわれています。その後、この周辺を含め各地に寺を建て、最後は会津の磐梯山です。そしてここにも5つの薬師寺を建てました。その中心となったのが慧日寺で、建立は西暦806年とされています。

徳一法師の建てた寺の多くは途中で宗派が変わってしまったり、廃れてなくなってしまうものなどが多く、はっきりしたことは分かっていません。そしてこれらの建立の年もほとんどが西暦807年(大同2年)と書かれているものばかりです。そのためどのような順番に建てられたのかなどはよく分かりません。

さて、この筑波山の中禅寺(現在の筑波山神社・大御堂)の周りを取り囲むように筑波四面薬師と呼ばれる寺が配置されています。筑波山の中禅寺を保護するために徳一法師が配置したと伝えられますが、そのうちの二つは最仙(最澄の高弟)が建立したと伝わっています。

これらを順に全部回ってみた時の感想を交えてこれらの四面薬師を紹介したいと思います。

① 朝望山東城寺(東成寺)(土浦市)

場所は旧新治村で、小町の里の少し西側です。石岡からは朝日トンネルが開通したため、近くなりました。

まず入口に古びた山門があり、そこをくぐると、両脇の木々の根がむき出しとなって連なつた山道(切通し)が続きます。多くの人が歩いたために長い年月をかけて道が沈んでしまったのかもしれない。そのまま進むと、寺の境内に続く古い石段があります。今は脇に車が通れる道もついています。石段を登ると、すぐに寺の鐘楼が見えます。

寺伝によれば、延暦15年(796年)に桓武天皇の勅願によつて、最仙(最澄の高弟)が天台宗の寺として創建したといわれています。その後、鎌倉時代になり小田氏の庇護を受け、真言宗に改宗しました。江戸時代に土浦藩の土屋氏の庇護を受けて、寺の名前を「東成寺」から「東城寺」に改めたといえます。

本殿は平成9年に火災(放火?)で焼失し、7年後に建て直されました。平安時代中期の作といわれる薬師如来坐像と日光・月光菩薩(薬師三尊坐像)があつたのですが、残念ながら一緒に焼けてしまったようです。今の本尊である薬師如来像はその後に造られたものです。

この東城寺の裏山に有名な経塚があります。末法思想が起こつた時に、大切な経文を金属製の筒にいれて、地面に埋めて保護したもので、このように多量の経筒が見つかったのは大変珍しいものです。この東城寺(東成寺)は徳一法師が立てたものではありませんが、この近くの古寺「清滝寺」は竜ヶ峰(中央青年の家へ上る桜並木のある場所)に徳一法師により創建され、後に古観音(山の中腹)

に移され、戦国期に焼失したが、享保年間に今の場所(小町の里入口奥)にて再建されたといわれていますので、こちらにこられたら是非清滝寺も訪れて見られることをお勧めします。

② 椎尾山薬王院(椎尾薬師) 桜川市椎尾

場所は桜川市真壁町椎尾(しいむ)です。名前の通り椎の木が生い茂る山の中に建つとても立派な寺です。

この椎尾山薬王院も桓武天皇の勅願所として、延暦元年(782年)に最仙上人が天台宗の寺として創建したと伝わっています。土浦市の東城寺と同じ最仙上人ですが、こちらの方が少し前になります。こちらも鎌倉時代に小田家の庇護を受けて真言宗に改宗しています。

椎尾山薬王院へは麓の入口より昔は歩いて上つていたのですが、今は舗装された山道をいくつものカーブのある道を登っていきます。この地は昔から椎の木が多かつたようで、樹齢五百年近いスタジイの樹叢は県の天然記念物に指定されています。現地の説明板によると椎尾は昔「志いの」といわれたといえます。

寺の入口部に建つ仁王門は、1687年に建てられたとても立派な造りです。この門の両サイドには大きな履物が飾られており、近くの足尾山の足尾神社と大いに関係があるのかもしれない。また門の中央の頭上部分には、大きな龍の彫り物があります。そしてなんとといっても、この薬王院はこの自然豊かな中に美しく聳える美しい三重塔がシンボルとなっています。江戸時代宝永元年(1704年)の建立で銅板葺で、高さは25mです。県の文化財に指定されています。

本尊である薬師瑠璃光如来像（鑄造）は鎌倉時代の作で三重の塔と共に県の文化財に指定されています。

本堂は1680年の建立で、市の文化財です。病氣平癒、眼病平癒、子授けなどにご利益があるとされています。

境内の鐘楼の脇に「土井晩翠」の漢詩の碑があります。

「暁鳴鐘 蓼梵刹清 緋袍戀戀有故人意」

（暁に打つ鐘の音はとうとうと響いて、寺が清らかである。その音色は故人の温情と恋慕う意がある。）

また、山門から下りずに脇の道から下りたところに、この寺をこよなく愛したという「平良兼」の碑がありました。平良兼は上総の介としてやってきた平高望の次男です。高望の長男は国香です。良兼は将門の伯父にあたります。真壁町羽鳥にこの平良兼の城（館）があったといわれています。

また菅原道真の第三子である菅原景行がこの椎尾の里に住んでいたといわれており、景行が父道真をひそかにこの羽鳥の地に埋葬した（天神塚古墳）という話もあります。

③ 菖蒲沢薬師（石岡市菖蒲沢）

石岡地区には四面薬師のうち北面と東面の二つの薬師が配置されました。

まず、最初は菖蒲沢薬師（東）です。最近市ホームページや観光案内などのパンフレットにも「薬師古道」として登場しています。

私が最初に訪れたのはこの「薬師古道」を地元森林組合などのボランティアの方が整備したのを記事で読んだからです。その以前に訪れた人の話を聞くと、山道をかき分け登っていくとその「薬

師堂」の佇まいに息を飲んだといえます。本当にそのような雰囲気を持った素敵な場所です。

二度目に訪れた時は丁度薬師堂の改修と中の薬師像の修理をしている時でした。薬師様はお留守でした。この山道を大きな薬師様運び出すのはさぞ大変だったと思います。運ぶためにお堂への脇道が造られていました。

三度目に訪ねた時はこの修理も終わり、案内板も増え、きれいになっていました。昔を知っている人やこの薬師堂の歴史を知っている人にとっては少し違和感のある姿に変わってしまったように思います。今までなかった燈籠を設置し、覗き燈籠などもあり、屋根の色も青い色に変えられ、全体の中で調和が取れていません。少し残念な思いがしました。

さて、菖蒲沢の薬師古道へは、八郷地区の辻のイチゴ団地を山側に入っていくとすぐに「薬師古道入口」の看板があります。案内看板に沿って細い上り坂を一気に登ると菖蒲沢の公民館に出ます。ここからは少し急な山道（丸太などで階段状にできたり登りやすくなっています）を十五分程登ると菖蒲沢の薬師堂が少し下がったくぼ地に見えます。この高いところから弁天池と薬師堂を見下ろす景色は石岡の景色の中でも「一」を争うほど美しい風景です。上にある龍神岩から見える石岡の町の景色もすばらしい眺めです。

④ 北面薬師（山寺）（石岡市小幡）

さて、この薬師は、小幡地区の山中にあり、山寺と呼ばれていましたが、今はその痕跡がわずかに残るだけです。

寺があった場所を訪ねて行ってみることにしま

した。小幡地区を過ぎて十三塚の果樹団地に進みます。

この道は筑波山の昔の筑波神社参道の道でそのまま登っていくと風返峠に到達します。

前方に筑波山の二つの頂がチョコンとのぞいています。とても分かりにくい場所です。目印になるのは、通りから右側の「鈴木觀光果樹園」の看板を目指して右に入っていきます。果樹園の脇を抜けて山の方に真っ直ぐと登ると「筑波霊園」の場所に出ます。

そこに山寺入口の看板が草に隠れていました。ここから山に登らずに、霊園の手前を右に入るとすぐに開けた広場があり、そこが山寺の跡地です。入口に椿の古木が数本。広場の中に入ると周りにはもみじ、竹林などが並んで、そこに古い石塔などが迎えてくれます。

山寺跡地の看板の山側は霊園となつていますが、造成したままでお墓はほとんどありません。かなり経つたようで、苔むしたりしたままの広場（造成地）が広がっていました。

ここ十三塚山寺跡地付近からの眺めも素晴らしいです。

山寺入口の果樹園と梅の花の間から少し先の小幡の街が見えます。この十三塚地区は果樹園が盛んな地区ですが、少し登っているので眺めもよくなっています。しかしこの先の筑波山への道は昔からの筑波山の信仰の道（瀬戸井街道）でもあり、天狗等が筑波山で決起したときの登った道です。結構急坂となり、一気に視界が開けてくるのですが、冬は車は通行止めとなります。

さて、この北面薬師（山寺）は廃寺となつてしまいましたが、この寺にあった薬師様は、現在、麓

の小幡地区にある「薬王院」に安置されています。薬王院は小幡の街から、「ゆりの郷」の方に右折するすぐ手前です。

では、ここにあったお堂はどうしたのでしょうか？

実は府中(石岡)の街にあった国分寺が1908年に大火にあつて焼けてしまいました。そこで、この山寺の薬師堂を1910年に移設したのです。今でも常陸国分寺跡にそのすばらしい姿を残しています。

国分寺ではお釈迦様の誕生日(4月8日)に花まつりが行なわれ、桜の満開の中で、この薬師堂の前も大変にぎわいます。

全国各地に十三塚という地名や塚があり、各地にそれぞれ名前のいわれが言い伝えられています。それらは武士が十三人ここで亡くなったとか、子供が不幸に合ったとかの話が多いのですが、この話は少し違ってきます。

× × ×

昔、筑波山を越えて、この地に一人の旅の僧侶が下つてまいりました。辺りも大分暗くなってきましたので、僧侶は近くにいた里人に「この辺りで泊めてくれる寺などはないだろうか？」と尋ねました。

里人は、「寺はこの先にあるが、今は無住で荒れ果てているので、この先の小幡の街まですぐだからそちらに泊まった方が良い」と勧めたのでした。しかし、旅の僧侶は「そのようなところこそ私が泊まるのに適しているところだ」と山の寺に泊まることにしました。

僧侶が寺で眠りにつくと、枕元に大きな猫が現れて、「この寺には化け物の大ネズミが住んでおり

ます。このネズミが人を食い殺したり悪さをしており困っておりますが、私一匹ではとても敵いません。私もネズミの言うことをきかないと殺されてしまいそうです。どうかお坊様の力で、他に十一匹の猫を集めてきていただきたいのです。十二匹の猫でこの化けネズミを退治したいと思います。そして、お坊様の法力を十二匹の猫にお授けください。」

と告げます。そこで坊主は翌日、近くから大きな猫を十一匹集め、寺に連れて戻りました。そして次の夜を迎えました。すると、夜中にもものすごい大きなうなり声やドタンバタンの大音響が響き渡りました。これがしばらく続いたのですがやがて辺りは静かになりました。朝になって見てみると、お寺の中にとても大きな一匹のネズミと十二匹の猫が死んでいました。僧侶は十二匹の猫と一匹のネズミを丁寧に葬って塚を築いたのでした。このため十三塚と呼ばれるようになったとい

× × ×

この話が、この北面薬師(山寺)に関する話かどうかはまったく分かりません。しかし、この山寺がもつともこの話にふさわしいと感じます。

この寺が何時ごろ無住の寺になったのかはわかりません。でもこんな伝説を生む地にふさわしいと思っただけです。この山寺のあった場所から2〜3km北に関東の清水寺と呼ばれる峰寺山西光院がすばらしい眺望の山の中腹に建っています。言い伝えによればこの寺も徳一法師が807年に創建したものです。また愛宕神社(岩間)や笠間神社など有名な神社および見事な庭園を持つ月山寺なども現在地ではありませんが、徳一法師の創建

が伝えられています。

一度昔を想像してノンビリと四面薬師を訪れてみてください。今までに見えなかった世界が見えてくるかもしれません。

何処からともなく、奈良・平安からの風が頬にやさしく吹いてくることでしょう。

桜の開花にさそわれて

小林幸枝

今年は二週間近くも早い桜の開花でびっくりさせられた。桜の花が咲き始めたのに釣られたわけではないけれど、茨城の歴史ウォーキングの本を眺めていて、笠間市に出かけてみたくなった。桜の花はまだ三分咲き程であったが、春風に誘われて出かけてきました。

①大石邸跡：「忠臣蔵」で知られる大石内蔵助の祖父で笠間藩浅野家の家老、大石良欽(よしたか)の邸宅跡です。忠臣蔵の話となった赤穂の藩主浅野家は、もとはこの笠間の藩主でした。竹垣に囲まれた一画に残されています。

②佐白山麓公演：鎌倉時代に笠間時朝によって築城された笠間城の下屋敷跡を公園にしたもので、時鐘楼、忠臣蔵の大石内蔵助像などがあり、歴史を感じる事ができます。またここは笠間の桜の名所として知られていますが、この日はまだ三分咲き程でした。

③笠間城跡：佐白山頂に築かれた笠間城跡。笠

間城は鎌倉時代初期に笠間時朝によって築城された自然の地形を巧みに生かした山城で、守に易く攻めるに難い城と言われた。現在、外堀の跡や巨石で作られた石垣が残されています。山頂の天守閣跡には佐志能神社があります。

④坂本九の歌碑：世界的な大ヒット曲「上を向いて歩こう」を歌った坂本九さんが、戦時中笠間の親戚の家に疎開してきて少年時代を過ごしました。その縁で、上を向いて歩こうの歌碑が建てられています。

⑤座頭市記念碑：勝新太郎の映画で有名になった座頭の市。悪人をバツタバツと切り倒す痛快時代劇。架空の人ですが、その座頭の市の出身地が笠間になっていたことから、座頭市物語の記念碑がたてられ有ります。

⑥林照寺：親鸞聖人を宗祖とする浄土真宗単立寺院で、鎌倉時代に誠信房によって開基されました。茅葺の古色蒼然とした本堂は、稲田ご草庵を偲ばせる精舎一字として、聖人の南無阿弥陀仏の謂れと念仏往生の教えを人々に厚く伝承しています。ここには笠間藩主から拝領のご紋と、蓮如上人四福の絵伝が残されています。

笠間城跡周辺はハイキング、散策などを楽しむことが出来、見どころも沢山あります。自然と歴史満載の里を春の季節に訪れてみるのも楽しいだろうと思います。おすすめのコースです。

第七回いしおか雛巡り

兼平ちえこ

シリーズでお伝えしています、石岡のおまつりで華やかさを添える山車の上に乗る人形のご紹介は今回はお休みします。

石岡のおまつりで賑わう石岡市中心市街地は去る二月十六日～三月三日まで、いしおか雛巡りが行われ、九二軒の参加店を中心に市街地は優しさと愛らしさに包まれました。

ふるさとで過ごした遠い日の「ひなまつり」を思い出させるような とてもなつかしい ひなまつり。『ただいま』『おかえりなさい』そう答えてくれる歳を重ねた母や父……。

本当のふるさとに帰ることが叶わなくともここにすれば『ただいま』と言える

あたたかなまち石岡。

おかえりなさい……いしおか

(いしおか雛巡りパンフレットより)

七回目の雛巡りは、歴史の里のひいな遊びと題して、石岡の歴史巡りと雛巡りを同時に楽しんで頂くという「歴史の里いしおか」に相応しい催しが工夫されました。

先ず常設展示場のひとつ、石岡市まちかど情報センターでは恒例になった歴史絵巻方式の雛飾りを今回は「源氏物語EMAKI二〇一二」と題し、源氏物語五十四帖の主役とそのエピソードを中心に作成されました。ひな人形達は主役になりきってまるで物語の主人公達が現代に舞い戻ってきたようでした。

作者、紫式部の異母弟の藤原北家藤原惟通(これ

みち)は、一〇一九年七月、常陸介(国府の長官)に任ぜられました。翌年一〇二〇年七月三日に任地(国府)で死去したとされ、惟通が没した後、母(式部の継母)と妻子は帰京せずに常陸國国府に住んだとされています。

物語の中では、常陸介として石岡に赴任した父親に同行し幼少期から娘時代を常陸國で過ごした女性が、源氏物語五十四帖、後半宇治十帖の女主人公浮舟として登場し、その浮舟が時の流れを越え石岡に帰ってきました。そして未来へ……。

情報センター内ではパソコンでの解説テープが流れ演じているひな人形と同じ目線で椅子に腰掛け、聞き入りながらの見学に、素晴らしい、お見事、壮観、日本の伝統ひなまつりを町ぐるみで取り組んでおられる方々の熱い思いが伝わりました。物語の詳しい説明をありがとう、解説がよかったです。等々沢山の感動が寄せられていました。

また町中のひなさま参加のお店には、お客様のおもてなしをする、しるしとして源氏香図の紋をデザインした札を掲示し、石岡の町に平安の雅の世界を表現し、札の中の和歌をきっかけにお客様との会話がはずみますことに思いを込めた展示も目に留まりました。

源氏香図とは、香道には和歌や物語文学を主題として数種の香木をたき、香りの違いをきめる「組香」というものがあり、江戸時代に始まった源氏香はその代表的なもので、五種類を五包ずつ、合計二十五本の香りの中からその香りを決めます。

五本の縦棒を結び横棒は結ばれた香木が同種の香りだったことを表すもので、その組み合わせを表現する図柄で組み合わせが五十二種類ある事から源氏物語五十四帖になぞられ、桐壺と夢の浮橋以

外のそれぞれの巻名をつけ、物語の中の代表的な歌を詠む事により、香の順を答えた事の代わりにするという展開になって行きます。香道のこの香合わせは、源氏香図の紋かるたという絵合わせ、かるたにも使われているそうです。

源氏香に見られるような雅な遊び心をお客様と共有し、まちなか全体につなげて行くという今回の「源氏物語EMAKI二〇一三」は私にとりましても多に楽しく勉強させて頂きました。

そしてまちなかの雛飾りで初めての壮大な展示がありました。「保元の乱」で平清盛に敗れ、讃岐に流され死去した崇徳天皇を祭神とする金刀比羅神社の参道いっぱいひな様達、海の守り神としては、造られた二m位の舟に乗ったひな様達、圧巻でした。

飾り付けは、ボーイ・ガールスカウトの皆さん、情報センターに来ていた子供さん達の協力があつたそうです。崇徳天皇の霊を慰め、歴史の里で平氏のまちである「石岡」の災厄を避けると共に、安心・安全・平和を祈願し、まちが活性化し発展することの願いが込められていました。

もうひとつ新しい企画で雛めぐりと歴史めぐりがドッキング、これは情報センター主催のルネッサンスの講師長谷川功先生による歴史とお雛さまの案内でした。この企画には勉強させて頂く為にも長谷川先生のお手伝いをさせて頂き、大木や遺跡からのパワーを頂いたり、おにぎりをほおぼりながら、和菓子店の美味しい饅頭をほおぼりながら、酒の試飲をしながら、ひな様との出会い、期間中、いずれも日曜日三日間で二十人余りの参加の皆さんと楽しく、面白く、美味しく、笑みのひな様の癒しをいただきながら、歴史の里いしおかを満喫

できました事に、参加店の皆さん、まちかど情報センターの皆さん、石岡商工会議所の皆さん、その他ご尽力くださいました方々に感謝申し上げます。来年も歴史の里いしおか、ならでは雛めぐりで多くの皆さんの来市を心待ちしています。

・春嵐 ひれ伏す水仙二人 ちえこ

初彼岸

伊東弓子

「ああ恋をしたい気持ちです」

と叫んだ私。年甲斐もなく出て来た言葉です。

風は爽やか、陽は光明が射す如くです。大地はしつとりと焦茶色、水に流れも耳に心地よく響いてきます。靄の中を彷徨っている時とは似ても似つかない世界です。季節が移ったのですね。女の子がスカートを着いて飛ぶように走っていきます。中男の小父さんが得意気にオートバイで通り過ぎ、若者は口笛を吹きながら長い脚で歩いています。春です。私が思わず大声で叫んだのも暗闇から脱け出されたからでしょう。こんな日が来るとは思ってもいかなかったのです。

あなたは何処へ行ったのですか。あの靄の中に入る前、あなたとお別れしましたね。あなたは一本のお線香の煙の中に消えていってしまったように思うのですが、彼処でお別れしてから何処へ行かれたのですか。私は寒く暗く淋しい靄の中を、あなたを呼んで姿を捜して歩きましたが、返事はなく姿も見えませんでした。一緒に生活してきた猫も金魚も鶏も後を追うように逝ってしまいました。

た。

こんな素晴らしい春はあなたが贈ってくれたのですか。あなたの煩惱が木々に花を着け、あなたの骨格が若木を伸ばし若芽をつけ、あなたの心が温かい風を送ってくれたのですね。一番病んでいた心臓は大地の栄養となって、沢山の生命を育んでくれたのですね。孫が見つけた小さな虫を見て「ああ、爺ちゃんかもしれない。殺しちゃだめだよ」

と先走って言うてしまいました。私の悪い癖です。彼岸には先祖が私達の周りに虫になって戻ってくるって聞いた事を思い出したからでした。

ギター文化館 2013 CONCERT SERIES

- 4月 8日 里山と風の音コンサート
- 4月20日 大嶋芳 ギターリサイタル
- 5月 5日 ギター文化館所蔵名器コンサート
藤井敬吾 北口功 角圭司
- 5月19日 大島直ギターリサイタル
- 5月25日 マリオ鈴木ギターリサイタル
- 6月 9日 國松龍次ギターリサイタル
- 6月23日 高橋竹童津軽三味線コンサート

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35
Tel0299-46-2457 Fax0299-46-2628

彼岸前から取り沙汰されていた桜の噂、遂に彼岸此方で花開きました。あなたが病んだ多臓器の苦しみが、この美しい花を早めに咲かせてくれたのだと思ひながら眺めています。全国彼方此方で人呼びの為其々の良さや特徴を競って宣伝し始めました。歌に詠まれ、文学に、絵に写真にと登場する桜、人との係りで人間生活を豊かにしてくれます。身近にある桜を今年も眺めて来てお知らせしますね。

石岡、玉里境の運動公園に商業高校にも参宮線沿いに咲いて、ガソリンカーからバスに変わっても乗客の目を楽しませてくれています。

開拓地や中台附近が工場地帯となった時、各会社が挙って植えた桜が咲くと地域の人を招待して花見の宴を開いて賑わった時もあるのですが、今は人員整理されたり、小規模化して集う人もなく花だけが宵を過ごしています。

農免道路が出来た当時農業の先端を進めていた人達が植えた桜が大きく枝を張っています。今の農業の状況を知ってか、知らでか花を沢山つけていました。

いつも思うのです。何故桜と電柱が歩道にあるのでしょうか。枝が伸びればあっちこっちを切られ、木は黒ずんで節くれだってくる。コンクリートを押上げて、排気ガスを吸い上げて根を張って頑張っています。アンバランスの枝に花をつけています。

平山、大井戸の台が出来た時、緋寒桜を植えた父親と息子さんの意志を継いで今年も咲いています。近くにブルーベリーを育て、眺めのよい山沿いの傾斜を手入れしている方の農園と相まって素晴らしい場所です。

女池の土手に植えた桜が育たず困っている人の話を聞くと、南風が強いせいらしいのです。

子供の数が減少している中で、統合か廃校か、又他の方法があるかと思案する中で、校庭の桜は古くから現在そして未来へと咲き続けることでしょうか。

桜は桜のために咲いているのですね。桜は美しいと思っっているのでしょうか。人が花との係わりで力づけてもらったり、美しいと思ったり、慰められたりしているのでしょうか。私の人生の中に桜との思い出があります。遠くにいるあなた、聞いて下さい。

一年生の時、春の遠足で桜池に行った時、池の上に枝を伸ばし咲いていた桜の木に、きよちゃんが登場して枝を揺すっている得意そうな顔が目につきます。六十年前の事が一枚の写真のように手元にあります。今は埋め立てられて消防玉里分所、学校給食センター、幼稚園、公園があります。以前は川中子、上玉里の水田を潤す池で江戸時代の絵図には「埴池」とも記されています。当時の村長と山口さんの話の中で、自然にある物はそこに必要としてある物だから壊さず次の世代に引き継いで方がいいと語り合ったそうですが、儘ならぬと言うことでした。

二年生の時の遠足は小川の赤身の地藏尊迄歩いたのです。地藏尊の山の上に広がった畑には菜の花畑が広がっていて、山の桜と菜の花の色が今でも忘れられない情景です。当時の畑は、小川小学校の校庭、校舎の敷地となり、地藏堂は個人の事情と重なって、反対側の平らな畑地に建てられました。毎月旧八日にはご縁日で開かれ、訪れる人も多く、ご接待もあつて賑わっていますよ。

子供を連れて良く歩きました村内の事をまだよく知らない頃、というか目を向ける暇もなかった家庭と職場を行往する頃でした。八郷の山を歩いた時、山桜が花吹雪となって幼い子供を包んでいました。その中の子供達のはしやぎながら行ったのはついせんだったような気がしません。あなたは父親、私は母親で若かった日です。それから十五、六年後遠くへ息子を行かせることになってしまった悲しい日があったわね。あの日通った山々にも山桜が杉や檜の間に、綿菓子のように咲いていました。山沿いの道を通る年を重ねた二人を花吹雪が包んでくれましたね。

戦いが終わって平和が戻って来た時、父は花の下でお檀家の人と酒でも飲み交わしたいものだと、境内に桜を植えました。花見は十年位続いたようでしたが世情も変わっていく中で人の心も変わっていったように思えました。お一人お一人の笑顔が憶べれます。

定年一年前の新年度のスタートの日の宵でした。満月と桜の時期が重なることは珍しいロマンチックな夕べでした。その人は三月で村内の校長先生を定年退職される送別会の後、寄って下さったのです。少年と少女の日を知っているだけの二人でしたが、何か素敵な思いを残してくれました。

戦争を進める手段だったのでしよう。花の美しさと散る姿の美しさ称えて国をあげて使われた桜。軍歌もその一つです。あなたは歌が好きでした。子供の頃大人に交じって兵隊さんを見送るのに元気に歌ったと言っていました。勇ましく胸躍らせて大声で歌ったと言う反面、今は罪を感じているとも話していました。兵隊で行く人、見送る家族の心の中はどうだったのだろう、と思うと悔

やまれてならないと言っていました。その事も何回も話しましたね。

母が楽しそうに話してくれた時の一枚の写真。桜の満開の下で生徒さんと写真を撮った時の物でした。同じ学校で教職についていた二人が出会った頃の写真です。戸田先生は左端、私は右端。その当時の事を語る母は一生その思いを大切にしていたようです。

思い出を肥やしにして人生を越えて行く事も、今の思いを未来へつないでいく事も大切にしていきます。あなたも力をかしてくださいね。

川中子から大井戸にかけて二十本位植えてある桜、「美霞エイト」の仲間が美しい霞ヶ浦であるように願って植えたとのことです。十六日川漁場、大河岸、藻場、江間、納屋場と玉里川御留川の歴史を語る所でもあります。

合併後二、三年市全体の区長会で決定したという事で、各区から桜の苗木が一本づつ植えられて、強い南風にも負けずに根づきました。稲荷の森、藩稗蔵、渡川場、川岸など藩との歴史を残す所でもあります。

今年には平山く高崎迄植える作業が始まるようです。湖と人の交流を考えての発想という事で最後は高崎の外れ、山王川附近に続くようです。

この事業とは別に飛田さんは霞ヶ浦の堤防を桜堤にして人の行き交う賑わいをつくれたらと願っていると話してくれました。一人一人の思いが大きく強く広がっていく事を望んで、実行出来るよう努力していきましょう。

古代には自然そのものが息づいていた流れ海でした。やがて人の生活となった川、人の都合で壊されていった湖、今又何とか人との繋がりを取り

戻そうとしています。

理想とする「彼岸」を求めて粘り強くいきましよう。あなたお盆に合いましようね。

【特別企画】

虚構と真実の谷間

打田昇三

第五章 怪(あや)しげな対決(1)

皮肉でも嫌味でも無いが、平和憲法が定着した現代に於いても公共放送が年末の番組を紅と白の合戦にしているのには少し疑問がある。それも純粹に歌唱力でも競うなら領(うなず)けるが、大袈裟な割には単純軽薄な内容でお茶を濁しているは命懸けで合戦をしていた御先祖様が憤慨するのでは？と余計な心配をしている。善意に解釈すればそれほど日本人に浸透しているのが「白旗の源氏」と「赤い旗の平家」の争いなのであろう。

恥ずかしい話だが「米英撃滅」を幼稚な頭に叩き込まれていた時代には「平家物語」に対抗するのが「源氏物語」なのだと思う。紫式部には「野蛮な戦争など書いたり致しません！」と怒られるであろうが、言わせて貰えば光源氏を中心にした複雑な男女の葛藤は戦争よりイヤラシイ：既作「才媛の時代」でも触れたが、世界的な文学作品と称される源氏物語には実在した二人の天皇の名前が登場人物に使われている。狂気のように国民を取り締まった大日本帝国時代の憲兵や特高警察は、これをどうにかしようとは思わなかったのであるうか：私がついているのは昭和十年代に

出されたものだが検閲の跡は見られない。当時の権力機構も、理不尽に威張っていた割には案外と抜けていたものである。源氏物語は原稿が出版社に行く前に権力者の藤原道長が紫式部の部屋へ入り込んで「先読み」していたから、それが検閲通過みたいなのでは誰もクレームをつけられなかったのかもしれない：これを「言論出版の自由」と言えるかどうか疑問はあるが：

源氏物語に実名で登場するのは第六十一代の朱雀(すざく)天皇と第六十三代の冷泉(れいぜい)天皇である。勿論、物語中の人物として書かれているから別人だと言えるけれども、名前を見れば大概の者はそれが本人だと思ってしまうから迷惑はかかる。紫式部が源氏物語を書いていたのは第六十六代的一条天皇時代であり本物の冷泉院は未だ存命中であった。朱雀院と冷泉院がなぜ選ばれた？のか：強いて理由を考えれば両院とも失礼な表現で申し訳ないが「行動を問題視された」正常では無いと判断された「お方だからである。しかし問題視したのが狂っていた？藤原一族なので案外、こちらのお二方のほうが正常だったりして：

もう、お一方、行動を問題視されたのが第二章でも触れたが実際の源氏の祖と言われる、と言うより「筑波嶺の峯より落つるみな川の恋ぞつもり淵となりぬる」の詠者として知られる第五十七代の陽成天皇(陽成院)である。清和天皇から讓位され九歳で即位したのだが乱行を理由に伯父さん(母后の兄)である摂政の藤原基経に廃された。在位八年ほどで自分から退職願を出したらしいのだが扱いは懲戒免職にされたから問題視される。しかし此の歌は優れた作品と言われるので、こういう歌が詠める人物が問題視されたこと

は逆に問題なのであろうと勘ぐっている。其の時代に筑波山を見たことも無いであろうと推測するが（京都から天皇が来るのであれば大げさな行列になるから…）それなのに、地元の人でも詠めないような正確な情景を歌に詠んでいる。

このお方は紫式部に問題人物とされる事も無く現実には淵となるほど恋い焦がれた女性と結ばれているらしい。皇后となったその女性（すいし）内親王と言い、宇多天皇の姉か妹で陽成院には叔母さんに当り、且つ少し年長だった。つまり桓武天皇の孫である。神話の世界にはなるが、その昔、神武天皇の両親は甥と叔母の関係（天つ日高日子波限建鸕草葺不合命（…うがやふきあえずのみこと）と玉依毘賣命（たまよりびめのみこと））なのであるから、陽成院の恋愛も別問題にはならないのだが、その婚姻が成立すると藤原氏が皇后を出して権力を伸ばす機会が失われる。かつて大英帝国でエドワード八世が退位に追い込まれた「シン普森事件」の逆のようなことで陽成院は責められた—と言うか、問題児にされてしまったのである。しかし、この快男児は退位してから何十年も生き抜いて意地を示した。後に桓武平氏と張り合う源氏は、本当はこの陽成天皇の子孫なのだ、始祖が問題人物にされてしまったために一代繰り上げて清和天皇を祖先と称している…という説が一般的なのである。

世の中、何事も競争であるから勝者と敗者が出るのは止むを得ないが、幼稚ながらも民主主義が定着した現代とは違い「無理が通れば道理ひっこむ」時代には、権力の座に就きさえすれば自分に都合の悪い相手は簡単な手続きで潰したり排除したりすることが出来た。便利なことに報酬さえ貰

えれば「容疑者や被告に不利な証言」「怪しげな証拠品集め」「密告・タレこみ」をする奴が居たようなので権力者は安心して仕事が進められる。歴史の嘘は、その段階で正当化されてしまうのである。世の中が狂ってくる。現代に伝えられている歴史は、そういう類（たぐい）のものが多し。

卑劣な手段により、罪無くして蹴落された者は原則的には泣き寝入りするしか無い。早々と此の章に登場して頂いた陽成・朱雀・冷泉の三院（三天皇）のように、律令制度の頂点にいる筈の天皇さえも行動を問題視されたり、強制的に退位させられたりするのであるから、いわゆる臣下の者は何時、如何なる疑惑を向けられるか分からない。

今までの各章で触れている部分もあるが、時の権力に抗して敗れ、或いは無実の罪で泣き寝入りさせられた歴史の犠牲者とも言える方々は数え切れないほど居た。これを信憑性の薄い神話時代では無く、外国（特に朝鮮半島）との関わりから実在が肯定されている飛鳥時代辺りから事件性の有りそうな例だけでも列記してみると、被害者は概ね次の様な顔ぶれになる。（敬称は略します）

- *九州地方を支配していた有力者であるが、新羅国と任那（みまな）国との関係から新興勢力の大和王朝に反逆者として攻められ結果的に大和王朝に興隆の機会を与えてしまったと推定される筑紫国造の磐井（いわい）—西暦五百年代
- *皇族ではなかった藤原光明子を皇后（聖武天皇の）と称することに異論を唱えるなど、藤原氏の専横にブレーキをかけたようにしたため、国家転覆罪を適用された長屋王（天武天皇の孫）
- *大化の改新で政権を奪われた蘇我王朝—蘇我一

族は中大兄皇子と藤原鎌足に倒された逆賊のように言われていたが、大和朝廷の前にあった王朝とする説が有力である。

- *壬申の乱で敗れた大友皇子、（概要を後述）
- *叔母さんの持統女帝に消された大津皇子—天智天皇には何人かの娘がいた。その多くは天武天皇の後宮に入っている。大田皇女は大津皇子を生鸕野彥（うのささら）皇女は皇妃となつて草壁皇子を生んだ。大津皇子は優れた人物であつたため、草壁皇子に皇位を継がせるこ鸕野彥皇孫を後の持統天皇から睨まれ謀反の罪で処刑された。辞世の歌「ももづたふ磐余（いわれ）の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ」などの名歌が万葉集に採録されている。なお草壁皇子は早逝し、鸕野皇女は自ら即位したりして孫の文武天皇から聖武天皇に至る天武系王朝の維持に努めた。
- *聖武天皇の子で母親が藤原氏で無いために殺された安積親王—聖武天皇と藤原光明子との間には孝謙天皇と幼くして死亡した男児があつた。安積親王は別に側室が生んだ皇子であり、聖武天皇は皇位継承男子として期待していたのだが天皇と旅をしていて足を骨折か捻挫した。天皇は大事をとり都に帰って保養させた。ところが、足の療養中に急死してしまった。日本の歴史の中で骨折か捻挫で死亡した例はこれだけ？
- *孝謙天皇が皇位継承者として探し出したのに藤原氏に邪魔をされた弓削の道鏡—従兄弟である藤原仲麻呂を信任していた孝謙天皇は仲麻呂が推す淳仁天皇（天武天皇の孫）に譲位したのだが、仲麻呂の強引な政治を嫌って、天智天皇の孫（第七皇子・志貴皇子の子で幼時に弓削氏の

養子となり僧として修行していた)道鏡を皇位に就けようとした。これを藤原一族が認める筈がなかったのである。なお、桓武天皇の父親・白壁王こと第四十九代の光仁天皇は弓削の道鏡の異母弟ということになる。此の人は飲めない酒を飲んだりしてグータラを装い、藤原氏の目を誤魔化して消されずに済んだ。

*藤原氏が桓武天皇を擁立するため巫蠱(ふこ)の変という忌まわしい罪名で廃された光仁天皇の井上皇后(聖武天皇皇女)と他戸(おさど)親王―第四章でも触れたが藤原一族による天智系皇統復権・天武系阻止の陰謀と思われる。

*桓武天皇の登場に不満で反乱を企図して逮捕された氷上川継(ひかみかわつぐ)―第二章に記載したが、此の人物は父親が天武天皇の孫である塩焼王であり、母親は聖武天皇の娘・不破内親王である。藤原百川らが母系に百済人の血が入っている山部親王(後の桓武天皇)を擁立することに對しての反発(クーデター計画)……とされるが事件の根底には桓武天皇の即位により皇統が天武天皇系から天智天皇系に変わること阻止する意図が在ったと推定される。この事件に連座した北家・藤原魚名は左大臣の職を解かれた。後に源頼朝に親任された小山氏や結城氏などは魚名の子孫と言われる。巫蠱の変とは逆に、これは天武系皇統の復活を企んだもの。

*桓武天皇の同母弟で皇太子に立てられていたため藤原種継暗殺の黒幕にされた早良(さわら)親王―第四章で触れたが、この人こそ完全な濡れ衣だったようで「平安京遷都を巡る反対運動」の巻き添えを喰らったらしい。身に覚えが全くなかったので「冤罪」のお手本になる。見方を

変えれば桓武天皇の子である平城天皇や嵯峨天皇など皇太子要員が何名も居た中で「弟が皇太子」というのは立場が微妙である……

*異母兄の平城天皇に反逆の疑いを持たれ母子共に自害させられた伊予親王(桓武天皇が寵愛した息子)―これは藤原氏の内部抗争でもあるが今一つ理由がはっきりしない事件である。単純に考えれば桓武天皇は大勢の息子たちの中で、伊予親王と一番に気が合っていた。皇位継承は母親の出自が鍵になる。平城・嵯峨の両天皇は母親が皇后(藤原乙牟漏)である。伊予親王の皇位継承は順位が低かったけれども、父帝に気に入られていることはマイナスになる。

*藤原氏の都合により作られた謀反の罪で仁明天皇の皇太子を廃された恒貞親王(淳和帝皇子)と親王側近の伴健峯(ともものこわみね)・橘逸勢(たちばなのはやなり)の二名―消された伊予親王は、桓武天皇の子でも平城、嵯峨両帝のように母親が皇后では無いので安定が悪い。淳和天皇の母親は、皇后の父(良継)と共に兄弟で桓武天皇の擁立に貢献した藤原百川であるから皇后系とは別系になり、必然的に恒貞親王の地位も時代の経過で不安定になるのである。そこに野心家の藤原良房(菅原道真を貶めた藤原時平の父)が出てきて、自分の妹が生んだ仁明天皇の子・文徳天皇を皇位に就けたいから、嵯峨天皇などが皇太子と決めていた恒貞親王は当然のように排除されたのであり、其の際に排除の理由として事件が作られる。

*平安宮殿内の応天門が炎上した事件で放火犯人とされた伴善男(ともものよしお)らと、その前に疑われた源信(みなもとのまこと)―文徳天

皇から清和天皇の時代に人臣の摂政として権力を持ち始めた藤原良房が独裁を通すために有能な官僚を排除しようとして仕組んだとする説があり、良房の本当の狙いは謹厳実直な実弟の右大臣・藤原良相であつたらしい。喰うか喰われるか、火災の原因が最初から放火とされて定石通り密告者が犯人を指名するという、陰謀の教科書のような事件である。

*菅原道真(概要を後述)

*世直しの夢が破れた平将門(第二章に記述)

*源高明(事件の概要を後述)

*将門の意志を継いで関東に君臨しようとして挫折した平忠常(第三章に記述、この章で補記)

*そのほか、大和朝廷や清和源氏一族、或いは豊臣秀吉らの「蝦夷征伐(奥州侵略)」によって虐げられた東北地方の国民……(第四章に記述)

……

代表的な事例だけを挙げたが、これらの事件でトバッチリを受けた人たちとか、此の他にも深い恨みを抱いて命を落とした者は数え切れないほど居たのである。歴史というのは正確には伝わり難いから、そう言う人たちが「無実であつたのに」とか「真実はこうであつた」とか後世の人々に納得して貰うのは容易なことでは無い。例えば「大友皇子」は天智天皇が亡くなってから二日後に皇位を継いだ身なのだが、戦いに敗れた為に歴代天皇の名簿から削られていた。それが千年も経つてから水戸光圀によって名譽の挽回と言うか「大日本史」に入れて貰うことが出来て、明治天皇が「弘文天皇」として第三十六代の地位を回復してくれたのであるが、千年は長過ぎる。トップの天皇さえこういう状況であるから、これが庶民なら十万

年ぐらいいは見えて置かないと疑いは晴らせない。

それでは「どうすれば良いのか！」ということになるのだが客観的に歴史をみると、何かの事件があり選抜された？犯人が非業の死を遂げた後には必ずと言って良いほど、世の中に良くないことが起こる。すると人々は「○○さんの祟りだ！」と言いつ出し、身に覚えの有る連中が慌てて神に祀ったり供養の法事をしたりする。日が暮れば暗黒の世界になる時代であるから陰陽師とかインチキ占い師などの言うことは百%信用して貰えたしまた、それだけ妖怪、幽霊、怨霊などの浮遊物体やら意味不明のものが活躍する場が多かった。

勝手に想像してみると、弱い立場にある無念の亡者たちは、あの世へ行ってから閻魔大王に「再審請求」をすると公平な審理が行われ「罪なし」と認定されれば「怨霊」の資格を与えられる。暗黒の世界ならば、あの世から派遣されて憎い相手を苦しめたり、地獄に引き摺り込むことも出来たようで、そういう話が尤もらしく伝えられているのである。しかし「地獄の沙汰も金次第」という諺があるから亡霊社会でも談合やら真正銘の闇取引が行われたこととは思うが：

例として挙げた筑紫の磐井以下、列記した人たちは多分、全員が閻魔大王から怨霊資格を認定して貰えたと思うのだが怨霊の中にも遠慮深い方がいたようで目立つような報復行為はしなかったらしく、実際の活躍？が伝えられるのは井上皇后、早良親王、伊予親王そして菅原道真、平将門ぐらいのようであるが、それらの方々は怨霊界を代表して行動しているからその威力は強大で縦横無尽の働きをした。中でも平将門や菅原道真は怨霊界のエースとして不動の地位を得たのである。

闇の世界ならば怨霊でなくても何でも出来そう
で「平家物語の巻一」にある「殿上闇討（でんじょうのやみうち）」などは天皇の居る場所で公家たちが気に入らない奴を暗殺しようとするのであり呆れるほど素晴らしい計画である。これもバレなければ怨霊の所為に出来たのだが、平忠盛は武士の出身であるから逆に暗闇を利用し武装しているように見せかけて敵の出鼻を挫いた。平安時代は公家社会の連中が長閑（のどか）に暮らしていたかも知れないが、社会全体は落ち着かない上に世相が陰悪化して盗賊がはびこり、人々の不安が増していた。誰かを蹴落としたとか、陰險な手段で他人を苦しめた連中は罪の意識で怯えているから怨霊が活躍するには絶好の時代ではあった。

歴史の嘘をテーマに書き進んでいるところに、百%が嘘のような怨霊や幽霊が登場させて祟りとか怨念だとか復讐だと言うのは矛盾があるとは思うのだが、ライフラインが完備され、街灯が点り、警察も裁判所も医療施設もある現代と違って「不可解」「不条理」が多かった時代には、その根本原因を何かに求めるしかなかったであろう。仏教の伝来による「因果応報」の観念が普及したことも一因なのであろうか：人々が、自分の理解を越える事象を全て「怪奇現象」と捉えたのも止むを得ないことであり、身に覚えの有る者は、これを祟りとして後悔したことであろう。

奈良時代から平安時代にかけては怨霊的なもの？が随所に登場するけれども神話時代と鎌倉時代以降には怨霊の出番が少ない：つまり人間の恨みの象徴である怨霊と、その報復行為は藤原氏が支配階層として君臨していた時代の特産物のようであり、裏を返せば藤原一族がそれだけデタラメ

な政治をしていたことになる。他の時代でも人為的な歴史の嘘で苦しめられた人物は多い筈なのだが：多分、神話時代は人間社会では無いから「神様の二重化け」は行われず、鎌倉時代からは被害者が強くなったり復讐用の武器が普及？したりして怨霊にならなくても仇が討てるようになったであろうと勝手に想像している。代表的な事例が「富士の裾野の仇討」であるが、この事件は「曾我兄弟」という怨霊に近い人物を利用した「源頼朝暗殺未遂」の陰謀であったと推測している。

源氏物語に話を戻すと、紫式部にモデルにされた二人の天皇のうち朱雀院の場合は三歳で皇太子となり八歳で即位させられたのだが、この天皇の時代は未だ藤原氏らに陥（おとしいれ）られた菅原道真が天神様となって復讐をする大事業が終わっていない時代である。平将門さえも天神様のお告げを頼ったと言われるくらいに権威のある存在であり、その威力と言うか怨念の壮絶さが、社会現象としては各地に盗賊の集団が蜂起して世間を脅かし「群盗京に満つ」と記録されている物騒な状況となり、健康面ではインフルエンザ平安型を始め疫病が流行って政府関係者が死亡し、災害では富士山が噴火し、都が珍しい冬の台風に襲われ大火災や大暴風雨が発生し、日照り続きで旱魃（かんばつ）の恐れがあったので雨乞いをしたら今度は雨が止まずに被害があり、陸奥国分寺や東大寺が不審火で焼け、天に不気味な雷鳴が轟いて人心を恐怖に晒すと言った状態であり、藤原一族ら身に覚えの有る当事者は夜毎に天神様の怖い顔を夢に見て怖れ戦（おのの）いている有り様であった。気象庁が無かった時代であるから、天変地異まで責任を負わされた天神様は当惑したと思うが、

実際に菅原道真を陥れた為に崇りを受けた人物は首謀者の藤原時平の急死を筆頭に、共謀した源光と言う右大臣は泥沼に沈んで遺体が上がらず、大納言の藤原清貫と参議の藤原菅根と中級の官僚一人が宮殿内で雷に打たれて即死した。また時平の娘を女御にしていた皇太子の保明親王（村上天皇の兄）が成人式を終えてから亡くなった。天神様の崇りが特に恐れられたのは陰謀を企んだ人物とその近親者などが狙われる正確さであり、身に覚えのある者は隠れようが無かった。

朱雀天皇（院）の母親は菅原道真を蹴落とした藤原時平の姉か妹であったから、崇られる順位は高い。本人もそれを承知しているので息子の朱雀院には恐怖が直に伝わる。気の毒なことではあるが、この天皇は外出を控え常に皇后である母親に抱かれて過ごしたと言われている。自然動物園のコアラではないからそれでは天皇の任務が果たせない。このため懲りない藤原氏が好き勝手に政治を行うことになり日本は立派な国になる。こうした状況から「俺でも天皇は勤まる！」と思いついで立ち上がったのが平将門であり、承平・天慶の乱はこの天皇の治世に起きたのである。

一般に伝えられている「菅原道真公追い落としの陰謀」は、宇多天皇や醍醐天皇に信任されている菅原道真を妬んだライバルの藤原時平（初の太政大臣となった良房の子）が醍醐天皇に讒言（ざんげん）をしたために、菅原道真は右大臣兼ねて内覧（摂政関白に準ずる地位）の職を解かれ太宰権師（ださいごんのそつ）に左遷され現地で悲嘆に暮れて死亡した…というものである。太宰府は当時の国防拠点であり、その長官が太宰師であるから国司級の官僚にとつては太宰権師などに中々

なれず、一つ下の地位である太宰大式（ださいのだいに）になるのさえ官僚にとつて夢の地位なのである。後に平清盛が出世の糸口を掴んだのも太宰大式になったからである。しかし、菅原道真の場合は官職が名ばかりの追放処分であつたろう。菅原道真の子らも罪人として各地に流された。

この出来事は「怨霊による崇りの規模」からすれば超一流の出来事なのであるが、表向きは「争乱」でも「事件」でも無く、飽く迄も「高官である菅原道真の左遷」という形で処理されている。左遷ならば現地で自由が得られる筈だが、実際には罪人として扱われていた。騒がれて真相がバレては困る事情が有つたことは明白なのである。

讒言であるから罪の内容も専門店で仕込んだ本格的なでっち上げであり、それこそ「嘘」で固めた作り話により皇位継承に絡む陰謀として藤原時平が醍醐天皇に報告したのである。怨霊となった菅原道真も、処罰の命令を許可した醍醐天皇には崇りを加減したが、逆に天皇のほうが気に病んで病気になるという。天皇の父親の宇多上皇は、道真の左遷を知り天皇に意見しようとしたのだが側近たちが逢わせなかつたらしい。やがて心労から病気になる菅原道真は遠く太宰府の地で他界した。あの世に行つてから事情を知る閻魔大王がアドバイスしてくれたお蔭で縦横の活躍が出来たのである。陰謀の発案者らは「左遷」という形で事務処理をしていたため犯罪の自覚が無い。菅原道真が崇るとは思つてもいなかったであろう。

そもそも菅原道真の家系は学者であり、父親は「参議」であつた。存在価値の分らない、と言うより全くの無駄で政治遊びの場と化しているような現代の参議（院）と違つて―其処まで言うな！

とするご意見が有るかもしれないが、東北震災の復興も俣ならぬ時期の国会で野党の女性議員が「女性官家の創設…」に絡む質問で「二千六百年続く万世一系の皇統云々…」と戦時中の様な質問で時間稼ぎをしていた。地方対策では差し迫つてやる事が山ほどあるのに…二千六百年前の世界はエジプト王国、アッシリア帝国滅亡の後にメディア、リディア、新バビロニアなどの国が興亡してペルシア王国が形成される時代であり中国は周王朝の末期、日本は邪馬壹国もやましい国も未だ出来ていなかった、と思うのだが…

当時の参議は中納言の下で国政に預かり「公卿（三位以上の高官）と共に国家の大事を議す」とされていて、チヨロチヨロしていたタレントや時代錯誤の女性などは間違えても選ばれない。太政官勤務のような重要な職務を無事に勤めた者が、又は諸国五か国の国司を無事に歴任した者から選抜されたのである。道真自身は讃岐の国司を務めて任期満了で帰ろうとしたら現地の人々が泣いて別れを惜しんだという。当時の国司は在任中に財産を溜め込むのが仕事で任期満了には塩を撒かれるのが普通であつたから道真は稀有の人である。

（続く）

《ふり》

アソビの書・書道会館の歴史をたどる。

（ギター文化館通り）

看板娘（大）「いらっしゃいちゃん」

皆さんをお迎えいたします。

03-6456-4300

【風の談話室】

いちどきに春の花がやちやちや、同時に春の風も吹き荒れたものだから、ゆつくりと風の花の色に染まっていたことを鑑賞する間も与えて貰えなかった。

子供の頃に七年ほど北海道に暮らしただことがあるが、その春の賑やかさに似た感じで、此処は北海道かと思ってしまう花々の開花であった。

異常気象と言えは異常気象なのだけれど、まあいろいろあつて良いじゃないか、とも思つてしまふ。

実際、我が家の庭(儘量も含めて)に梅、桜、桃、沈下花、椿、木蓮などが一斉に花開くなんてことはめつたにお目にかかれるものではないのだからラッキーと喜ぶべきであらう。

だが如何ににぎやか、華やかだとは言つても、これが今生の見納めとなる風前のもし火にはなつて貰いたくはないが…。

【「ヨイショ」広場】(陸平を「ヨイショ」する会)

声にすべしよばの力

増尾尚子

「ことば」とは、意味(意思)を伝える最大のものと思つていた。しかし、最近「人間と言語」、沈黙を含めた音・叫び・声について学ぶ機会があり、ことが音によつてことば以上の意味を持つこと、音がことばの意味以上の意味を伝えることを理論的に理解した。宮沢賢治の『風の又三郎』のドツテドウドウ、ドドウドドウドウ、ザッコザッコの擬態音や詩歌の朗読、芝居等を思い出せば確かに納得である。

そして、このことを昨年六月、ギター文化館ことば座公演で体験した。白井啓治さん朗読の市川紀行さんの原発を憂う詩「ついに太陽をとらえた」である。その詩が地域文芸誌に発表された時から素晴らしいと感じていたが、白井さんの朗読は、市川さんの怒りや苦しみ、子どもやふるさとの未来を憂う心を、東海村村上村長へのエールとともに活字で読んだときとは別の感覚で重く私に伝えてきた。音、声になったことばの力である。そして、その感動は、朗読会と原発講演会開催への思いとなった。

感動はいつも大きな力を与えてくれるものである。その思いは、市川さん、村上さん、多くの地域の仲間の賛同と協力で五月十一日、美浦村中央公民館大ホールで実現する。しかも朗読にあわせてピアノや舞、照明も入る美しい舞台となる。そして、その後には、村上村長の体験と実践、知性に基づく信頼にあふれた講演が並ぶ。原発に対する私たちの不安や心配、その現実を心と体で感じ、理性をもって多くの方々へ原発のありようを考えて頂く機会になればと願っている。

さて、冒頭から白井さんの素晴らしい朗読の力を盾に、前置きの長いイベントPRとなったが、今回の本題は朗読舞「苺萱姫物語」である。朗々とした白井さんのことばにのせた小林幸枝さんの手話舞、柏木久美子さんの舞は、時に力強く、時に美しく悲しく、原作の物語にこめた私の思いを彷彿とさせてくれた。

朗読舞「苺萱姫物語」は、霞ヶ浦湖畔の村、美浦村が発刊した「ふるさと美浦の昔物語」二十六話の中のひとつ、将門伝説「苺萱姫物語」を題材にしていると、柏木さんからお聞きした。美浦の

昔物語は、「苺萱姫物語」に限らずだが、地方史関連で自治体がまとめたものには珍しい創作性の強い民話物語である。地域に伝わる微かな言い伝えや少ない資料を基に、一般一職員が歴史専門家の指導を受け創作したものである。地域の方々へのふるさとへの愛着に繋がればと、二十年近く前、気楽な読み物として自治体広報紙に約四年間連載された。史実の研究もことばの表現も稚拙で恥ずかしいほどだが、ふるさとの記憶はそれぞれに伝わったようで、美浦の昔物語から様々な作品も生まれた。こどもたちのための笑いとユーモアにあふれた紙芝居、ストーリーテラーとシンセサイザー奏者によるCD、そして、ことば座の朗読舞ように地域劇団の手による演劇舞台等、原作者に取っては本當にうれしい発展となった。

思い起こせば、私にとつての「苺萱姫物語」は、父と娘の親子愛、将門と姫の恋、ふるさとへの愛着である。小林さんの舞に戦国武士の野心と苦しみを感じ、柏木さんの舞に苺萱姫の美しくも健気な愛を感じた。そして、白井さんの朗読することばという意味のある美しい音の響きに酔いしれた。ときめくような湖岸の村の月明かり、夜の湖に写るゆれる月、さざ波の響き、美しい村の風景が浮かび、早くに逝つたやさしい父や人々の幸福のために尽くす尊い人を思い、真夜中に物語を綴ったことがよみがえった。

劇団宙の会の「信太の小笛」(将門伝説・信太太郎物語)の時もそうであったが、私のつたない「苺萱姫物語」は、素晴らしい脚本演出家に出会い、声にすることばの力によつて美しい感動の物語、舞台に生まれ変わった。そして、今年十月の東京両国シアターXでの公演は、それがさらにグ

リードアップするという。とてもとても楽しみみである。

【ことば座だより】

振り返ればそこに恋歌が…

白井啓治

「振り返ればそこに恋歌が…」

これは六月定期公演のタイトルである。六月公演は十五日（土）、十六日（日）の二日間行われるが、この日は当風の会の会報発行七周年記念展が同時に開催されることになっている。

ことば座は、ふるさと風の会のスタートに半年遅れて創設した兄妹にあたる「ふるさとの物語を朗読舞に表現」する劇団である。ことば座も十二月には七周年を迎えることになる。当然十二月には七周年記念公演となるのであるが、今年十月に東京公演を行うことから、発信基地であるギター文化館での記念公演は繰り上げて、風の会と一緒に「おおう」と言うことになった。

七周年記念と言うことで、新作の披露ではなく、過去の作品の中から、小林のお気に入りの舞のいくつかを選んでお届けしようと思う。ギター文化館を発信基地としてスタートする時に、物語創りの基本軸を「常世の国の恋物語」とし、百の恋物語への挑戦することにしたのであった。そして、現在三十一話まで進み、今回のベストセレクション版は三十二話となる。

小林のお気に入りの舞詩の中で、石岡の伝説鈴ヶ池物語」の中に挿入された舞詩がある。この舞詩は、私の書いた新説鈴ヶ池物語の最後に舞う舞

詩として打田昇三兄が書き下ろしたものである。今日はその歌を紹介しよう。

貴方は誰ですか

澱んだ池の蛇ですか

疎まれて嫌われて恨みつのって…

もう、終りにしましょう

やつれた姿の覚えてます

いつも地獄ですか

紅蓮の大蛇（おろち）の舌ですか

負け戦城落ちて一人残って…

もう、誰もいません

雄叫びも遠く消えています

醜い姿ですか

情念に狂う蛟（みずち）ですか

毒を吐いて命奪って呪い続けて…

もう、城跡はありません

貴女の名さえ知りません

昨年、美浦村でこの詩を久しぶりに舞ったのであったが、今回はどんな舞いになるか楽しみみである。二月から柏木久美子さんのスタジオへ舞の基礎訓練に出かけており、これまでとは違った新しい舞いが見られるものと期待している。

六月公演では、昨年に続き柏木久美子さんに伊藤道郎のナンバーから「怖れ」「希望」の二つの舞を演じて貰います。また、柏木さんに何か好きな詩があったら一緒に朗読舞しましょうかと言ったところ、市川紀行さんが詠まれた「春の陸平に立ちて歌う」を舞いたいとの事。

市川さんの詩を朗読するのは昨年に続き二度目になるが、私にとって自己表現に借りる詩としては感情移入がし易く、私流の風の声となってくれる嬉しい詩である。

今月は、「イシヨ」の広場へ新しい友人増尾さんから投稿を頂いた。増尾さんの書かれた美浦村の伝説「刈萱姫物語」をモチーフにして、ホルストの「日本組曲」を主題とする舞劇は、ことば座東京公演として十月に両国シアターXで上演される。

ふるさと風の会の掲げる「ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考えよう」が超スローではあるけれど、確実に進んでいる事は喜ばべきことである。風の会では皆様の投稿をお待ちしております。400字詰め原稿用紙5枚程度まで…。

5月号は5月11日発行予定です。

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>

工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で
紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で…、また大好きな雑木林に一滴みの土を分けてもらい、自分の風の声を「ふるさとの風景」に唄ってみませんか。オカリナの製作・オカリナ演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465
Tel 0299-55-4411

ふるさと風の会7周年記念展

「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」を掲げ、自分達の思いや考えを確りと表現していこうと立ち上げた「ふるさと風の会」も5月末でまる7周年となりました。毎月発行しております会報も通巻84号となります。

振り向けば来し方の何と短くある、とは言われますが、どうしてどうして実に変で長い時間と距離でした。とても春の世の夢の如しとはいきません。

毎年、6月には兄妹グループである「劇団ことば座」の発信基地であるギター文化館での定期公演に合わせて、ふるさと風の会の「歩み展」を開いてきましたが、今年も6月15日（土）、16日（日）（10時～14:30）で風の会歩み展を行います。

絵手紙から出発し、風のことは絵という新しいジャンルを確立した兼平ちえこが指導する「ことは絵同好会」の皆さんの展示発表会も同時開催いたします。

自分たちの暮らすふる里をギター文化館で改めて見つめなおしてみませんか。

ふるさと風の会展（10:00～14:30）入場無料。ギター文化館 Tel 0299-46-2457

皆様のおこしをお待ちいたしております。

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com/>

ギター文化館発「ことば座」第25回定期公演

「常世の国の恋物語」第32話

「振り返ればそこに恋歌が」

2013年6月15日、16日（4時開場、14時30分開演）

ことば座第25回定期公演は、これまでお届けしてきた常世の国の恋物語1話～31話までの中から小林幸枝のベストセレクション3の手話舞を「振り向けばそこに恋歌が」と題してお届けします。

また「ふるさと風の会」7周年記念応援舞台として石岡に伝わる伝説を基に朗読舞劇として書き下ろした「新説鈴ヶ池物語」を朗読中心のバージョンに改作したものをお届けします。

第23回定期公演より、モダンダンスの柏木久美子が山本光のピアノ伴奏で伊藤道郎ナンバーを演じて貰っていますが今回は、シューマンのシンフォニック・エチュードより「怖れ」スクリアビンのプレリュードより「希望」を舞います。

また、朗読舞として市川紀行作の「春の陸平に立ちて歌う」を朗読：白井啓治、舞：柏木久美子、ピアノ伴奏：山本光でお届けします。

※入場券 3,000円（小中学生 1,800円）ギター文化館 0299-46-2457 にて発売。

ことば座 〒315-0013 茨城県石岡市府中5-1-35

Tel 0299-24-2063 fax 0299-23-0150